
シグルズと巨人

水乃ヘルギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シグルズと巨人

【Nコード】

N0321A

【作者名】

水乃ヘルギ

【あらすじ】

英雄シグルズと王女ヒルトの恋物語。永遠の愛を信じるヒルトと、愛なんていらねえよ、2004年の思想のシグルズ。グズルーンとの関係も気になるところで。

この物語は・・・。

これもシリーズ化しちゃうのかなー。

やあ。またお会いしましたね。
ってこのネタ古いし。

シングルスは、三日くらい前に原作の紹介したからわかると想うんだけど。

私はシングルスとブリュンヒルトが、かわいそうで、かわいそうで
タマランチ会長！ てなファンでして。

巨人？

もちろん、オーデインの一族ですよ。

オーデインはもともと、アングルボダという巨人のおかあちゃん
から生まれた長男ですから。

お父ちゃんは神様。（創造神？）

弟がヴィリ、ヴェー。

三人はとっても悪い神様で、創造するんじゃーといいながら、巨
人殺しをしています。

そしてオーデインは星を持ち上げて世界をつくる。

このへんが、エッダの巫女の予言といわれるプロローグ部分です。

それにしてもオーデイン様。

どうして悪いんでしょうねえ。

しかも、英雄シングルズのことまで殺してしまったり。

自分の子孫なのに……。

はちゃめちやすぎて、ついていけない物語。

それが……北欧神話、といわれるゲルマンの神話なので
す。

この物語は・・・（後書き）

シグルズはジーフリト、不死身のザイフリート、ジークフリード
と、作家によってですが名前が変化しています。

ここではシグルズで統一しましょう。

登場人物

【シグルズ】

古代ゲルマン人というのは、苗字を持たない。
乱暴もので単細胞。

オーデインの時代から祖先に伝わってきた『名剣グラム』を大事
にしている。

ヒルトを愛するが、その愛情に不満を抱く。

【ブリュンヒルト】

通称ヒルト。

シグルズに呪いのルーンをはずしてもらってから、愛に目覚める
女勇者。

普段は凛々しい乙女だが、シグルズの前では、しおらしい。

【レギン】

巨人族出身の鍛冶屋。
イングナ・フレイを慕い、ヒルトを養女にし、シグルズを弟子に
とる。

【ファーヴニル】

気の弱いレギンの兄。
竜に変身する力はあるものの、それだけ。
シグルズにいじめられている。

【シグムント】

シグルズの父。ネーデルラントの王様で、
気高くやさしさにあふれた、
ヴェルスング家の英雄。
乱暴もののシグルズに呆れて困っていたりする。

【シグニー】

シグルズの母でありシグムントの実の妹。
シグルズを生んですぐ死んでしまった。

【ゲルズ】

イングナ・フレイの妻。
巨人族の美しい娘。
巨人の宝を持っている。

【イングナ・フレイ】

ユングヴィ・フレイともいう。
ユングリング王朝の王子で、しかも妖精界の王様。
ユングリング王国王位継承者。
シグルズの友人でありながら神であることを隠している。

【フニカル】

オーディンが姿を変えた、不吉な隻眼の老人。
シグルズに無理やりついていき、疫病神と化す……………。

【グズルーン】

ブルグント（東ゴート）の王女様。
不吉な夢を見たせいで、恋をしたくないからと、心を閉ざし、
ブリュンヒルトに予言の意味を尋ねる。

【テウデベルト】

じつはテオドリクス。

グズルーンを妻にほしがり、なぜかシグルズをライバル視する。

登場人物（後書き）

オリジナル創作、シグルズと巨人。
シリーズものの第一弾です。

かくして・・・。

ネーデルラントの王でシグムントは、非常に男っぷりがよく、二ベルンゲン族の大將にふさわしかった。

ところが、いとこのシゲイルが、シグムントをねたみ始め、戦争で殺してしまおうとする。

いきなり奇襲をけしかけたシゲイルの軍勢に押され、それでもシグムントは戦った。

戦って、勝とうとした。

しかし、突如あらわれたいつかのジイさん　隻眼の、いやらしげに笑う小汚い賢者は、この世のものと思えぬほど美しい槍で、シグムントを貫いてしまった。

それは、グングニルという魔法の槍で、いかなる屈強な鎧でも貫いてしまうというものだった。

シグムントは、かわいい息子がみなしこになってしまうことを恐れ、老人に頼み込んだ。

「頼む、あの子を孤児にするわけにはいかない、助けてくれ。せめてあの子が十五になるくらいまでは、生きたいんだ」

「よからう」

爺さんはひげを揺らして答えた。

「契約したからな」

爺さんはシグムントの傷を癒すと、代わりにシゲイルの命をいただくことにして、槍でシゲイルの心臓を貫いた。

「ぐはあ！　そんな！」

シゲイルは死んだと想ったシグムントが生き返ったので、驚きながら他界していった。

「あなた、このグラムの所持者だろう。あの時どうして、俺にこいつを渡したんだ」

老人はうひょひよ、ときみの悪い笑みをしながら、

「知りたいか。え？ それはな、お前には素質があるからだよ」

「素質？」

「お前の息子にもある。グラムを持つ資格がな」

シグムントは途方にくれて、美しく輝くグラムを鞘に収めた。

資格というのは、全世界をすべる力を持つ資格という意味で、いわば世界王の名にふさわしい、ということをお前は言いたかったのだろう。

だがこの剣は、ただの剣にあらず。

もともと資格があつたとしても、それにふさわしくない行いをすれば、たちまち、権威ごと自滅してしまふ恐れもあつた。

それと、剣を持つ実力もないのに手にすると禍が起こる、とも・
・・・。

かくしてシグルズは十四になった。

シグムントはどうせなら、もうちょっとだけ生きてみたいと想い、

「シグルズ。父さんと一緒に竜退治にいかないか」

と申し、竜の生き血を飲もうと旅に出た。

竜の生き血は不老不死の力があるという。

シグムントは、どうせならもう少し生きたいと願いつつ、フランケンの山を目指す。

どうせなら、もう少し・・・いや、できれば永遠の世界を見たい、と。

かくして・・・。(後書き)

お父さん欲張っちゃって。

でも親が生きてそばにいてくれるのって、やっぱりうれしいものでしょうな。

孤児の勇者よりは、こういう設定のほうがなんぼか好き。

忘れちゃった

シグムントは山の中腹にいる大きな翼の竜を見つけ、グラムを構えた。

「待ってくれよお、殺さないでくれよお」

よくみるとまだ子供の竜で、涙ながらに訴えた。

「だが、お前を殺して生き血を飲まねば、私はあの爺さんに命を奪われてしまう」

「それなら」

とファーヴニル。

「ぼくの血がほしただけなら、いくらでも。ナイフで皮膚をちよつと切つて、飲んだら」

「なぬ。そんな簡単でいいのか・・・」

シグムントはファーヴニルの傷口からにじみ出る血をなめた。

シグルズも同じようにしてなめる。

「ところでお願いがあるんだけど」

ファーヴニルが遠慮がちに尋ねると、シグムントは血のお礼だといつて、

「なんだね、何でも言ってみな」

と答えた。

「ありがとう、僕には弟がいるんだけど、今ではヒョルヴァルズつて王様の鍛冶屋なんだ。あいつに会つて、その剣を鍛えてもらいなさい。それから、鍛冶屋にいるヒルトちゃんに会つて、ここにつれてきておくれ」

「おやじ、簡単な話じゃねえか。やってやろうぜ。なっ」

シグルズはシグムントの肩を乱暴に殴ると、

「いいぜ、その役目、俺がやってやるよ」

こうして親子は山をおり、ヒョルヴァルズ王に謁見すると、鍛冶屋に剣を鍛えてもらい、シグルズはその弟子になった。

ヒルドという娘がいたく気に入り、ファーヴニルとの約束を忘れてしまったが……。

「しかしね、兄さん」

ヒヨルヴァルズ王はシグムントに声をかけた。

「シグルズはだいじょうぶなんでしょうか……」

「だいじょうぶって、なにが」

「あんなに強いと、兄さんのように戦争に借り出され、……あの子まで殺したくないものですから」

シグルズはヒルトと会うと、ときどきして、うつとりするほど美しいヒルトにベタばれであったが、どこかで不安だった。

いつか、彼女が離れてしまうのではなからうかと。

ヒルドもそれは同じで、シグルズを愛し、レギンのもとで眠りっぱなしだった自分を目覚めさせてくれた勇者だから、どうしても離れたくなかった。

たったひとりの愛する人だから！

「あ、そうだ、いけね！」

シグルズは突然舌を出した。

「どうしたの」

「俺、ファーヴニルにお前を連れて行ってくて、約束しちゃったんだな」

「それいつの話？」

「えーと、一年前……」

ひよおおおお……。

一陣の寒風が、シグルズとヒルドの間を駆け抜けていった。

忘れちゃった（後書き）

サガ物語の連続というたくらみを発信させたまでにはいいんだけど、
歯止めが利かなかつたりしてね（汗）。

サガの主役たちはとにかく好き放題やってくれちゃってますから・
・・・・。

俺は英雄様

シグルズがファーヴニルにあわせたヒルドは、じつをいうとヴァルキューレといって、軍乙女、すなわち、ヴァルハラ的女戦士であつた。

ヴァルハラはエインヘリアルと呼ばれる英霊の集う場所で、雲の向こうにそこが存在すると、古代のヴァイキングたちに信じられてきた。

オーデインの前で技を競い合つて、死んだものは生き返らせてもらえ、夜に宴会し、また昼になると戦う。

死んだ上に死ぬって、どういう気持ちなんでしょうか（汗）

それはまあ、おいといて。

ファーヴニルはヒルドに黄金の指輪を与え、

「ヒルドちゃんが一番好きな人に、これを与えたら？」

そこでヒルドはシグルズに与えようとする。

「俺でいいのか？」

ヒルドはうなずいて、大切そうに両手で指輪を渡す。

「でも、気をつけて。シグルズがもし、ヒルドちゃんを裏切ろうつて時は、この指環には妖精アンドヴァリの呪いがかかっているんだ、死が訪れるよ」

「かまうもんか」

シグルズは豪快に大笑い。

「かまうもんか。俺はお前の血を飲んでるんだぞ、カンタンに死んでたまるかつつの」

「あんた、わかつてねーだろ！ だから裏切ったら死ぬのっ」

「じゃあ裏切らねえよ」

ファーヴニルはわかつてもらえたのか不安になった。

「ま、まあとにかく、がんばってね……」

「それに、だ。俺は英雄様だぞ。今では地上界を制覇できるほどの
そんなやつに弱みなんてないね。呪いさえもはじき返すだろうよ」
「なんて傲慢な……」

ファーヴニルは呆れてしまってものがいえずにいたという。

俺は英雄様（後書き）

これが、これが勇者の本質なんだよー！（叫。

鞭打ち百回

「むっ……」

シグムントはある朝、井戸で顔を洗っていると、いつぞやの爺が現れたのを察知し、

「何のようだ」

とぶつきらばうに尋ねた。

「そう怒りなさんな」

老人は歳の割りにしつかりした歯並びで、にかつと笑った。

「ゲルズを知っているか」

シグムントは知らないと答えた。

「イングナ・フレイ、ユングヴィの親族であくどい巨人だよ」

「ほう」

「息子のシグルズにそいつを退治させちゃあ、どうだい」

シグムントは驚いて聞き返していた。

「まさか、あんた、あの子にやらせるつもりか。冗談じゃないぞ。

あれは俺のかわいい子だ」

「ワシとの契約を破ったくせに」

シグムントは言い返せなかったが、

「その代償、というわけか」

と皮肉を言った。

「そうじゃ。まあとにかく、倅はもうござ」

シグムントはシグルズを不憫に想ったが、後の祭りとうなだれ、撃沈していた。

じつはゲルズはあくどくもなければ、汚くもない、ただの娘であつた。

なぜ老人はシグルズを使ってゲルズを殺させようとしたか。

それは、彼がフレイとけんかをした際に、腹立ち紛れで起こした行動であった。

老人はフニカルと名乗り、シグルズをいかだに乗せてライン川くだりをはじめた。

「ユングリングねえ。遠いんだろうなあ」

フレイ以降はオーラヴ・トリユグヴェソンという人間の王が統治することとなる、ユングリング王国。

フニカルはシグルズがこれでフレイと仲間割れしてくれたらいいと、ニヤニヤほくそえんだ。

ユングヴィ、シグルズ、と呼ぶ間柄の彼らは、幼馴染でもあり、永遠にその友情を誓おうということになり、銀色の神々の守りをお互い持っていた。

「農耕神フレイルをかたどった。シグルズと僕は、永遠の友達だよ・
・・・・」

だが今日は、フレイへの挨拶ではなかった。

フニカルが画策し、フレイへ戦争の挑戦状をたたきつけるため、出かけるのであった。

そんなことは露も知らないシグルズ。

フニカルは人間を利用し、そして、殺す役目を帯びていた。

そう、彼こそが主神オーディンなのである。

「あの人もあくどいわね」

妻のフリッグが鼻を鳴らした。

ノルンの女神たちは、フリッグの顔色を窺い、青ざめている。

「まあしかたないわ。あのひとだもの、ねえ、フレイヤ」

オーデインの愛人、フレイヤもうなずいた。

「戻ってきたら、鞭打ちの刑！」

フリッグは、茨の鞭を床にぴしゃりと投げつけた。

鞭打ち百回（後書き）

このくだりの解説ですが・・・・・・・・。

オーデインはめったにけんかをしないフレイと、おやつを取り合い、けんかになりました（汗）。

そこで根に持つ性格のオーデインは、フレイをどん底まで叩き落そうとし、苦勞して愛する妻を手に入れたことをスキールニルというフレイの召使の人間から聞き、（スキーは神話上、裏切りキャラっぱい）じゃあゲルズ殺せば、半端じゃなく泣くな、あのやろうつてことになったわけです。

いんちきくせー神様だなや・・・・・・・・。汗

移動する名剣

「あはははは……」

スキルニルはフニカル、すなわちオーデインの召使であるカラス（フギン）から連絡をもらい、

「フレイ様、いや、イングナ・フレイをこれで抹殺、ユングリングはわが国のものに」

ひとり、ほくそえんでいた。

それを聞いていたゲルズは、フレイに逃げましょう、逃げましょうと促すが、人のいいフレイはスキルニルを心底信じていて、

「だいじょうぶだよ、スキーに限って裏切ったりなどあるもんかい」
「でもあなた！ あなたがトール様から授かった大事な剣を、私な
どのために上げてしまったじゃないの」

フレイは懐かしそうに思い出し、

「うん、そんなことあったね」

とのんきに答えた。

ゲルズとの結婚をするのに、フレイは大きな犠牲を払った。

フレイを守る魔法の剣があり、その剣は敵が近づくと自動的に敵を切り刻んだ。

その剣がほしいとスキルニルから告げられ、フレイはゲルズの愛を得られるならたやすいことだと、カンタンにゆずってしまったのだ。

「私は今、幸せです。あのころは何も知らなくて、何度もあなたを拒んだけどね」

巨人族のきれいな娘は、英雄フレイに寄り添った。

「いいんだよ、今があれば。ぼくはそのため……君を愛

するためにだけ、生まれてきたようなものだ」

「フレイ様。でも怖かったわ。スキルニルは私にあなたとの結婚を承諾しなければ、呪いの刻印を刻むと脅したのですから……」

・
」

フレイはそれを聞いて、

「なに？ それは本当か？」

と真顔でゲルズに迫る。

しかしフレイはもうひとつの事実を知らなかった。

その剣が今、シグルズの手に渡っていることを。

なにせ、オーディンが変装してスキルニルを殴り倒し、そのあとでシグルンドに剣を渡したのだから。

……だから、いわくつきなんだよな……。

移動する名剣（後書き）

グラムさん、いそがしいですなあ。

まるで出張・・・・・・・・じゃないですか（w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0321a/>

シグルズと巨人

2010年10月9日20時03分発行